

シンポジウム 12 企画概要

タイトル	看とりに必要な「言語」と「行動」(仮)
------	---------------------

テーマ

在宅や施設など病院以外での看取りが大きな社会的課題になっている。しかしそこには様々なハードルが存在する。苦しむ人と最期までどう向き合えばいいのかを、みなさんと具体的に考えたい。

概要

医療機関別の在宅看とり数を眺めると2極化していることに気がつく。さらに1年間に看とりが一例も無い在宅療養支援診療所が半数も存在する。施設の看とりに関しても同様である。看とりと一言でいっても、そこに至るまでは様々なハードルが存在し、そこをクリアできないために「最期は病院」となるケースが多いと聞いている。また1例も看取りを経験していない施設の管理者にその理由を聞くと、とにかく「死」が怖いと答えてくれた。

住み慣れた地域で最期まで住み続けることを支援するには、様々な知識や技術が必要である。しかしそれはいまだオープンにされていない部分も多い。患者さんやご家族のトータルペインに向き合い死を迎えるためには、どのようなプロセスを経ているのかを具体的に議論してみたい。寄り添うという技術を、誰にでも分かるように言語化されることが強く望まれる。そして単に生きるだけでなく、日々の生活をどのように楽しむかという視点もさらに重要となる。

本シンポジウムでは、寄り添うことを書籍等ですでに言語化し、医療のみならず介護関係者にも啓発をしてやまない小澤竹俊先生をお迎えし、氏の教えの真髓を学びたい。一方「患者さんを楽ませる、喜ばせる」という視点では我が国の第一人者である岡原医師のスピリットを是非皆さんに知っていただきたい。岡原先生はパッチアダムスを師と仰ぎ、演劇「死に顔ピース」のモデルとしても有名である。

小澤氏は「言葉」の達人であり、岡原氏は「行動」の達人と言いかえることもできる。このお二人のエキスパートから、言語化された具体的支援法を、「言葉」と「行動」という2つの視点で参加者にお伝えし議論を深めたい。できれば、具体的事例1例に対する支援の在り方を3者で話し合いたい。

本シンポジウムでは医療者のみならず福祉・介護者にも参加して頂き、終末期の接し方、看とりについて深く知ることが目的である。その結果、地域での看取りの裾野が広がることを期待している。